

「日中戦争の多角的分析」

盧溝橋事件再論

北海道大学 岩谷 將

本稿は1937年7月7日に生じた盧溝橋事件とその後の展開過程について、日中双方の史料を用いて再検討を行うものである。従来、盧溝橋事件をめぐるのは最初の一発を誰が撃ったのかに関心が集中し、なぜ事態が拡大したのかについては、実証的解明はそれほど進んでいなかった。中国、台湾を中心に盧溝橋事件以降の展開は、日本の戦争拡大の意図によってもたらされたと考えられていたからである。1990年代に入り、秦郁彦が日中双方の史料を用いて盧溝橋事件拡大の過程を詳細にあとづけ、日中双方の現地と中央の認識のズレ、また日中それぞれの当局者の相互不信によって互いの誤算が積み重なり事態拡大へと導いたと論じた。

秦の論考によって、事態の経過そのものはほぼ明らかになったといつてよい。しかしながら、当時の史料状況では、中国側の行動がどのような情報やどのような意図に基づいていたのか、依然として不明であった。しかし、近年、蒋介石日記、蒋中正総統档案、戴笠史料などが公開され、中国側の意思決定を解明することが可能となった。また、一部ではあるが、中国側の出先である第29軍の状況についても把握することができるようになった。本稿はこれらの新史料を加えることによって、中国側を中心とした盧溝橋事件拡大の要因を検討する。